

OTOGAWA

おとがわプロジェクトとは——愛知県岡崎市を舞台に、2015年4月から2020年3月の5年間、主要回遊動線「QURUWA(くるわ)」を中心として、4つの「関連する主要なまちづくり」を組み合わせながらエリアの再生を図るプロジェクトです。

f おとがわプロジェクト Q

自分たちの
まちが
できるまで

GRAND OTOGAWA PROJECT DESIGN

CONTENTS

- 02 PROJECT SUMMARY / 2016年度おとがわプロジェクトの全体像
- 04 PROJECT REVIEW / 「ノー・シン・まちづくり」+「かわまちづくり」の進展報告
- 06 WORKSHOP REPORT / 中央緑道・龍田公園基本設計ワークショップ
- 08 SYMPOSIUM / エリア再生連続シンポジウム「ニューヨーク編 尾道編」
- 10 WORKSHOP REPORT / まちのトレジャーハンティング@岡崎
- 12 FORUM / 私たちのQURUWA戦略
- 14 PROGRAM REPORT / シンポジウム「まちで見つける、まちを楽しむ」岡崎のまちなかのイメージについて話してみる会
- 15 CONFERENCE DATA / プロジェクトを支える3つの会議

「OTOGAWA GRAND DESIGN Log 自分たちのまちができるまで」とは、公共資産の有効活用を通じて、民間活力の発掘・育成や民間投資の誘発を図り、持続可能な都市経営の実現を目指す公民連携まちづくりの記録集です。

第4号となる本号では、議論の土台となる活動をまとめる「2016年度おとがわプロジェクトの全体像」4つの主要まちづくりから先行する「リノベーションまちづくり」+「かわまちづくり」の進展報告、設計方針と活用計画を結びつける「中央緑道・龍田公園基本設計ワークショップ」、エリア再生の先進事例を学ぶ「エリア再生連続シンポジウム「ニューヨーク編 尾道編」」。さらに未来の暮らし方から都市戦略を考える「まちのトレジャーハンティング@岡崎」、これからの都市戦略のあり方を議論する「私たちのQURUWA戦略フォーラム」、関連するシンポジウムまちで見つける、まちを楽しむ「コッポ」岡崎のまちなかのイメージについて話してみる会。そして、政策との調整を図る「プロジェクトを支える3つの会議」のデータベースを収録する。

Vol. 4

プロジェクトサマリー

2016年度 おとがわ プロジェクトの 全体像

おとがわプロジェクトの2年目となった2016年度は、1年目にまかれた種が徐々に芽吹いた年だったと言えます。

2015年度、リノベーションまちづくりの一環で進められた「岡崎家守構想」が2016年6月に公表されました。同時に、遊休不動産を活用して集中的に変化を起こすエリアに設定された籠田公園周辺に第1号の「グラスパークビル」が誕生。さらに、連尺通りの「一陸堂喫茶室」、昨年度のリノベーションスクールで提案された二七市通りの「wagamama house」が相次いでオープン[→P.4参照]。

2016年1月、「まちづくりワークショップ」での

『かわまちづくり分科会』の提案内容は、殿橋下流の乙川で水辺活用を促進する社会実験「おとがわ!ンダーランド2016」として7月から9月にかけて実現。公募で集まった34のプログラムが実施され、殿橋橋詰に設置された仮設のオープンカフェ「殿橋テラス」は、水辺に誘う滞留拠点として多くの人でにぎわいました[→P.5参照]。

8月には、「基本構想(市民提案)」で提言された「デザイン会議」[→P.15参照]を発足。公共空間と民間遊休不動産の利活用から、魅力的なコンテンツを充実・集積する仮説として主要回遊動線「QURUWA」が設定され、「歩いて楽しく、自転車で回れて、車ででも来やすいまち」を目指す方針が示されました。

上記「まちづくりワークショップ」の『人道橋・中央緑道・籠田公園分科会』の提案は、(仮称)セントラルアベニュー(以下、「CA」という。)の基本設計を検討する「QURUWA FUTURE VISION[10月-12月]」に引き継がれ、中央緑道や籠田公園の具体的な使い方を考えながら基本設計の検討を行いました[→P.6-7参照]。

1月に実施した「エリア再生連続シンポジウム」[→P.8-9参照]では、乙川リバーフロント地区(以

下、「RF地区」という。)のまちづくりの道しるべとなる先進事例として、公共空間の大転換が起こっているニューヨークのストリートデザインと、地域資源を活かして雇用を生んでいる尾道の観光産業をテーマとしました。

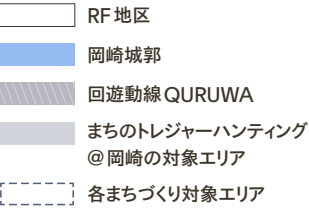
2月に開催した「まちのトレジャーハンティング@岡崎」[→P.10-11参照]では、上述の具体的なプロジェクトに携わってきた市民、事業者、市担当者に加え、市内外から公募で名乗りを上げた総勢40名の参加者が集まりました。QURUWAを5つのエリアに分け、各ユニットを率いる専門家とこれまでの取り組みや議論を踏まえて、潜在的な課題や資源を掘り起こし、自分たちの実現したい暮らしとまちの将来像を重ね合わせた都市戦略が提案されました。

今年度の集大成となる「まちなか未来戦略フォーラム」私たちのQURUWA戦略」[→P.12-13参照]では、これまでの2年間の歩みを振り返り、「トレジャーハンティング」の成果を踏まえ、デザイン会議メンバーである専門家陣と内田市市長の4名によるパネルディスカッションを行いました。5か年のおとがわプロジェクトの残り3年間と完了後の展開も見据え、民間主導の公民連携まちづくりについて展望しました。

主要回遊動線

QURUWA

157.2haにのぼるRF地区で、様々な取り組みや事業がバラバラに動いても目に見える変化を生み出すことは困難です。そこで、第1回デザイン会議において、すでに起こっている公共と民間の動きを下敷きに、これから起こしていく事業・プロジェクトを集中させ、連鎖的にわかりやすい変化を起こしていく優先的なエリアを、ひとつなぎの回遊動線として設定することが提案されました。



主要回遊動線QURUWAとは

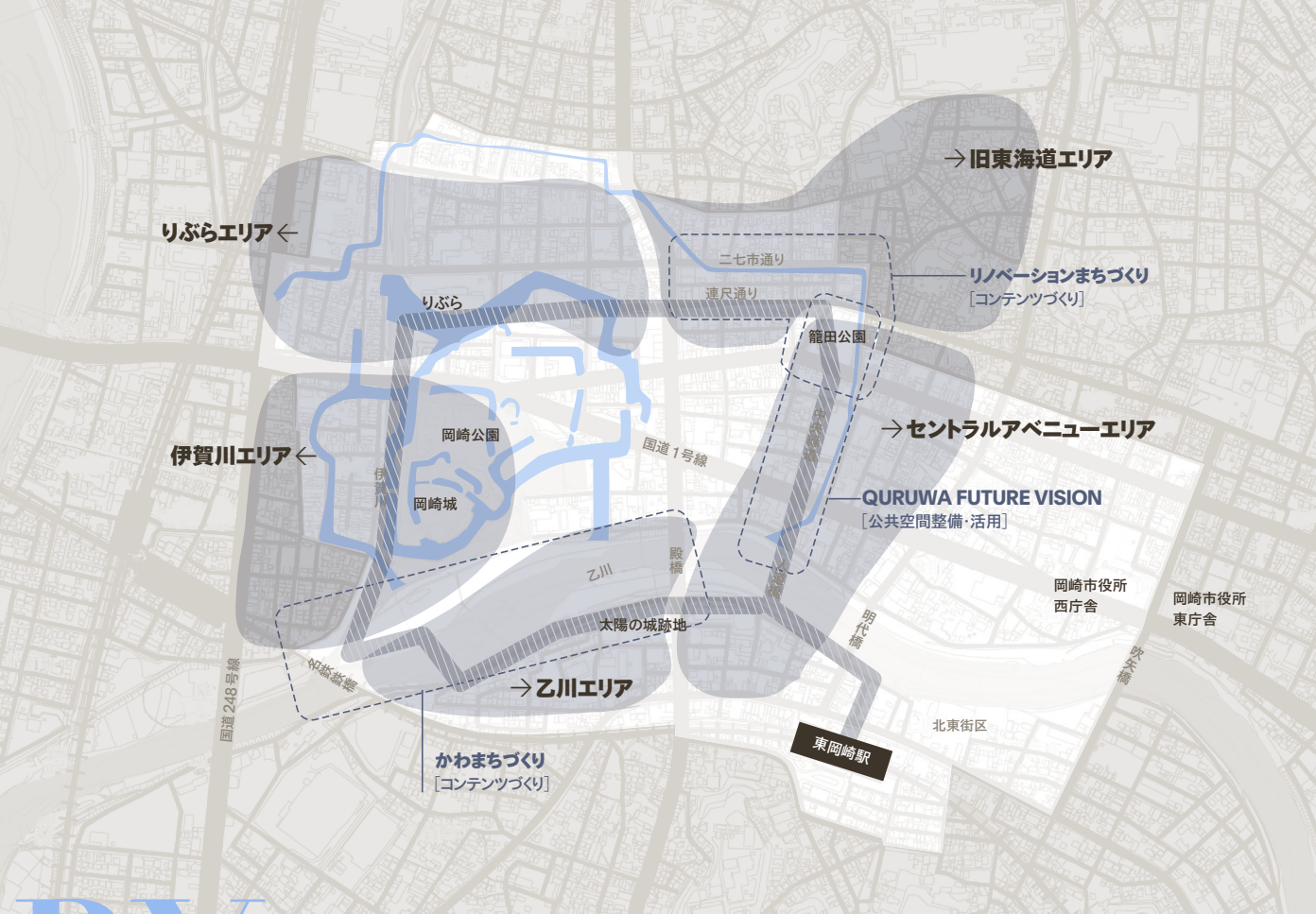
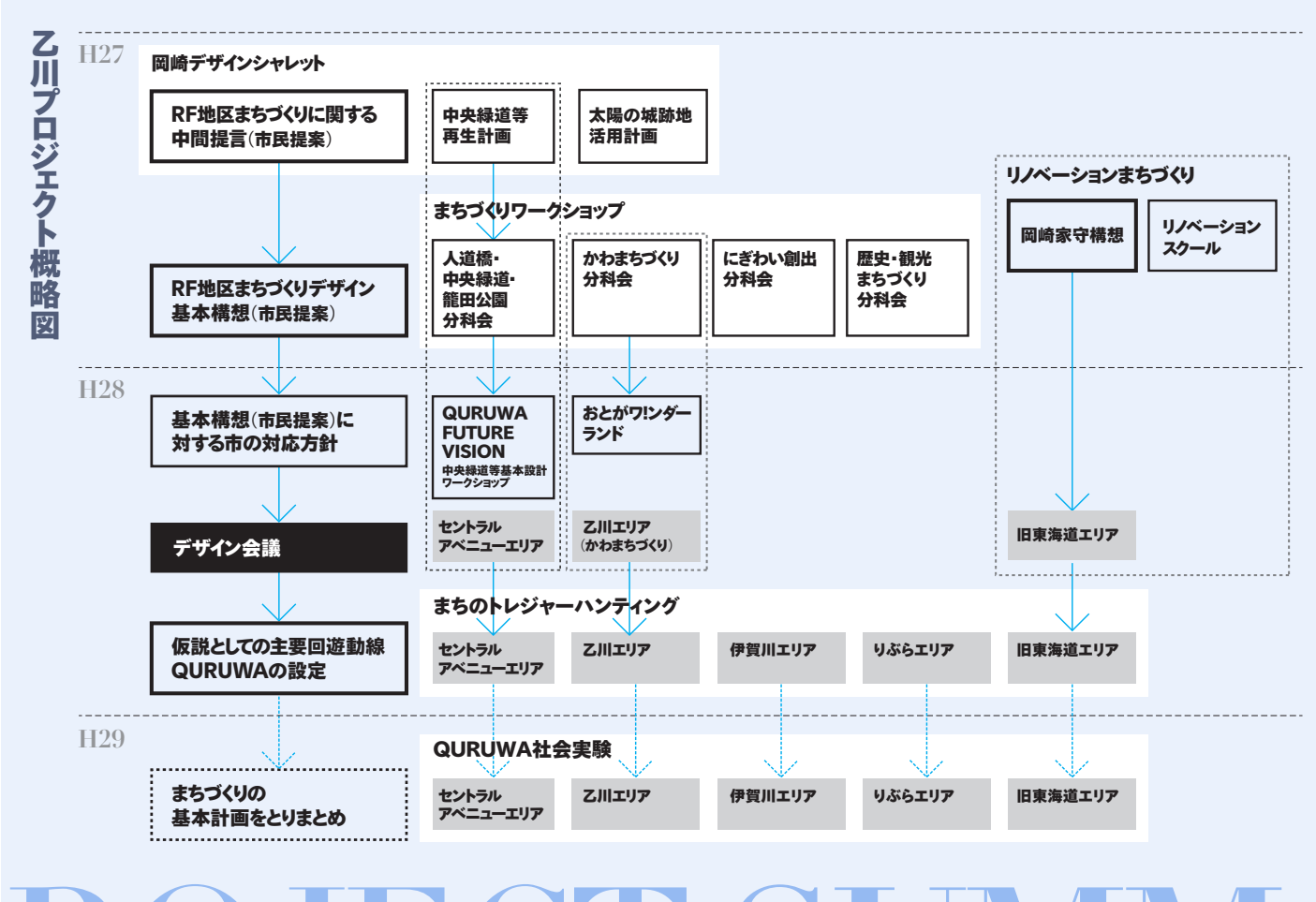
河岸段丘の地形、江戸から近代の歴史的遺産、戦災復興後に形成された商業地区、まちなかを東西北に流れる川の水辺、新たに生まれた魅力的なコンテンツなど、凝縮されたRF地区の魅力を味わうことができる約3kmの「Q」の字の回遊動線。旧岡崎城跡の堀や石垣などで築かれた総曲輪と重なる部分も多いことから「QURUWA(くるわ)」というネーミングが生まれました。

公共主導の「大きなリノベーション」+ 民間主導の「小さなリノベーション」

CAと乙川河川緑地が描く「逆Tの字」における公共空間の再整備「大きなリノベーション」と、リノベーションまちづくりが牽引する民間遊休不動産の利活用「小さなリノベーション」を組み合わせ、公民連携によるまちづくりに取り組んでいる点が、RF地区の特徴と言えます。QURUWAが設定されたことで、公共と民間がそれぞれ責任を持って役割を担う公民連携まちづくりの輪郭が見えてきました。

QURUWA上の 公民連携によるまちづくり

- 1 公共投資により質の高い空間を実現する(=大きなリノベーション)。
CA、乙川河川緑地等の整備
- 2 民間主導により目的地となる魅力的なコンテンツをエリアごとに創りだし(=小さなリノベーション)、つなげていく。その担い手を発掘し、育成する。
リノベーションまちづくり | 旧東海道エリア
かわまちづくり | 乙川エリア
- 3 滞留を促すプレイスメイキング(心地よい居場所づくり)や社会実験を通じた規制緩和により公共空間を有効活用する。
- 4 敷地単体ではなく、エリアの価値を高めるマネジメントを推進する。
- 5 エリアの価値を高めることで、民間投資を誘発し、持続可能な都市経営を実現を目指す。



主要まちづくりレビュー

リノベーション まちづくり

2015年度より、中心市街地の課題について、地区内にある「遊休化した不動産」という「空間資源」と「潜在的な地域資源」を活用して、これまで行政が行ってきた手法とは違った形で、都市・地域経営課題について複合的な課題解決を図るまちづくりが始まり、今年度は、その方向性を提示するビジョン「岡崎家守構想」が発表されました。また、これらの取り組みをきっかけに実際のプロジェクトが順次形になっています。

「リノベーションスクール@岡崎」

第2回：2016年10月21日〔金〕－23日〔日〕
会場：岡崎シビック6F

スクールマスター

嶋田洋平 | Yohei Shimada

ユニットマスター

福井信行 | Nobuyuki Fukui

瀬川 翠 | Midori Segawa

三浦文典 | Takenori Miura

ライブアクター

明石卓巳 | Takumi Akashi

渡辺潤平 | Junpei Watanabe

馬場祐介 | Yusuke Baba

桜林直子 | Naoko Sakurabayashi

- －6/11 | 気になる家守の会 vol.1
「岡崎家守構想」発表
- －8/17 | シンポジウム vol.3
「エリアリノベーション／点の動きを面展開」
ゲスト：馬場正尊 | 株式会社 OpenA
- －9/14 | ポテンシャル物件ツアー
- －9/14 | シンポジウム vol.4
「空き家マッチングからはじまるまちづくり／
長野・門前暮らしのすすめ」
ゲスト：倉石智典 | 株式会社 MYROOM
- －10/21-23 | 第2回リノベーションスクール
- －9/14, 11/10, 11/30, 12/26 |
家守 table ①②③④

魅力的な暮らしと大人に 出会うまち

リノベーションまちづくりの第一弾民間主導プロジェクトとして、元武道具店のビルを改装して籠田公園横に誕生した「グラスパークビル」で、リノベーションの事例発表やトークセッションなどを行うイベント「気になる家守の会 vol.1」が6月11日に開催され、民間のビジョ



一隆堂ビル/一隆堂喫茶室

ン「岡崎家守構想」が発表されました。「岡崎家守構想」とは、まず民間主体でリノベーションのプロジェクトを動かし、それを行政がサポートしていくまちづくりを進めていく、というものです。対象地区は、乙川を囲む中心市街地のエリアです。かつてこのエリアは、岡崎市民だけでなく、周辺市町の人々にとっても働き、遊び、学ぶことができる憧れの繁華街でした。しかし現在、空き家や空きビルが多く存在しています。そんな場所に、リノベーションによって新たな物語を添え、「魅力的な暮らしと大人に出会うまち」を創り出そうという取り組みです。

スモールエリアの変化の兆し

2016年7月には、家守構想検討委員であった

老舗の手焼きせんべい店の店主が手掛ける喫茶店「一隆堂喫茶室」がオープン。2階に設けられた読書室では書道教室が定期開催され、3階には北欧雑貨のセレクトショップが入居しています。月末の土曜日には厳選されたジャズが流れる「ジャズ喫茶」イベントが開催されるなど、複合的な文化を発信する拠点となっています。同10月には、2015年度に行われた「第1回リノベーションスクール」の第1号事業化案件である「wagamama house」が二七市通りに開店しました。wagamama houseは、地域の子育てママや女性が活き活きと働き、輝ける場所となるよう、女性たちが一念発起し起業して生まれた、安心安全かつおいしい地元の食材にこだわった惣菜と焼き菓子・ケーキを販売するお店です。

不定期に、無農薬野菜やこだわりのクラフト雑貨や食器などのポップアップショップ(期間限定のお店)の出店があり、女性の活躍の場を広げています。また、高齢者が多く暮らす中心市街地において、量り売りの手づくり惣菜が好評を得るなど、この地域に新しい価値を加えています。ほかにもリノベーションスクールで提案されたゲストハウスや、新たに石窯料理店の出店が計画されるなど、これまでこのまちになかった新しい暮らしを提示するプロジェクトが誕生したことで、人が集まり始め、エリアに変化の兆しが現れています。

主要まちづくりレビュー

かわまちづくり

乙川と言えば、春は桜の名所として、夏は花火大会の舞台として大変なにぎわいを見せるものの、これまでは行政主催の行催事しか認められず、市民が自由に使える場所ではありませんでした。「かわまちづくり支援制度」の規制緩和により、民間主導の河川空間の活用が可能となったが、どんな活用が可能で、どんな活用が適しているのか、河川空間を使う上でどういった課題があるのかについて検証する必要がありました。河川敷で民間の営業活動を展開しやすくし、まちなかの水辺空間を日常的な暮らしの舞台にする、かわまちづくりの挑戦が始まった。

「おとがワ!ンダーランド」

期間：2016年7月19日〔火〕－9月14日〔水〕

殿橋テラスは8月26日〔土〕－11月6日〔日〕

場所：乙川河川敷

主催：乙川リバーフロント地区かわまちづくり協議会、岡崎市

運営：チーム・おとがワ!ンダーランド

(NPO法人岡崎まち育てセンターりた、有限会社ハートビートプラン)

- －8/21 | コア期間キックオフセレモニー
- －8/21-28 | コア期間実施
- －9/3 | ミズベリング乙川会議
- －9/24 | 泰平の祈り

「乙川RF地区かわまちづくり協議会」

- －4/25 | 第6回協議会
- －5/24 | 第7回協議会
- －7/4 | 第8回協議会
- －10/24 | 第9回協議会
- －3/16 | 第10回協議会

「プロジェクトミーティング」乙川RF地区かわまちづくり活用実行委員会

- －6/4 | 第1回プロジェクトミーティング
- －6/25 | 第2回プロジェクトミーティング
- －10/5 | 第3回プロジェクトミーティング



コア期間の様子



旧額田の木材を利用した乙床

水辺活用の可能性を 模索する社会実験

中心市街地を流れる乙川の河川敷や水上を舞台に、水辺空間を使いこなす事業者や団体を公募し、水辺活用の可能性を模索する社会実験「おとがワ!ンダーランド」(平成28年7月19日－9月4日)を開催。全国各地の水辺で人気が高まっているSUP(スタンドアップパドルボード)の体験教室・クルージングやフライキャスティング(釣り竿を使って毛ばりを遠くに飛ばしたり、的を狙ったりする競技)の全国大会、水上に浮かべた遊具を使った川遊びやライブイベント、スケボーパークの実施、市内外の飲食店の出店など、多様な34のプログラムが実施されました。その他自主事業として、乙川上流の旧額田産木材を使ったベンチや間伐材を使った木製ガーランドの装飾などにより、水辺空間を心地よく過ごせるための居場所づくりを実施しました。さらに、水辺活用の戦略的拠点として、岡崎城

と乙川が一望でき、1日に約2万台の自動車交通量があり人の目につきやすい殿橋橋詰に「殿橋テラス」を設置し、仮設のオープンカフェとして営業しました。河川敷への誘導効果も高く、通過するだけの場所が交流の拠点になり、岡崎のよさを再認識する場所として認知されました。

見えてきた可能性と課題

乙川を自ら使いこなした新たな風景をつくろうという意欲的なプログラム実施者により、水上や広大な河川敷を使ったスポーツ・アクティビティを始め、様々な使い方の可能性が見えた一方で、集客の課題が浮き彫りになりました。また、トイレや電気、給排水といったインフラ設備の必要性や水位上昇時の撤去リスクの軽減など、プログラム実施者の負担を減らすためにクリアすべき課題が明らかになりました。今後、日常的に水辺が使われる風景を目指して、これら課題の解消を図りつつ、水辺活用の仕組みを検討していきます。



欄干を利用したカウンターをもつ殿橋テラス

中央緑道・ 籠田公園 基本設計 ワークショップ

〔仮称〕セントラルアベニュー（以下、「CA」という。）は東岡崎駅と中心市街地を結ぶ重要な動線軸であると同時に、「歩いて楽しく、自転車で回れて、車でも来やすいまち」を体現する新しい公共空間の象徴として生まれ変わることが期待されています。

それは物理的なデザインのみで果たされるものではなく、「どのように使いたいか」、ひいては「このまちでどんな暮らしをしたいか」という、将来この場所を使う人、このまちに暮らす人の意思や関わり方と空間デザインとが相互に呼応して初めて可能となります。

「QURUWA FUTURE VISION」は、CAデザインチームとワークショップ参加者の設計案と活用法に関する真剣なキャッチボールの場となりました。

長谷川浩己 | Hiroki Hasegawa
オンサイト計画設計事務所パートナー/
武蔵野美術大学教授
清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
リノベーションまちづくりプロデューサー/
アフタヌーンサエティ代表
青木 純 | Jun Aoki
(株)まめくらし 代表取締役/(株)都電家守舎 代表取締役

〔第1回〕

日時：2016年10月10日〔月祝〕13:00-16:30
会場：岡崎市社会福祉協議会サービスセンター、
籠田公園

トークセッション講師：

長谷川浩己 | Hiroki Hasegawa
清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
青木 純 | Jun Aoki
加藤寛之 | Hiroyuki Kato
株式会社サルトコラボレイティブ代表取締役

〔第2回〕

日時：2016年11月6日〔日〕13:00-16:00
会場：岡崎市社会福祉協議会サービスセンター

〔第3回〕

日時：2016年12月10日〔土〕13:00-16:00
会場：岡崎市社会福祉協議会サービスセンター

第1回

公共空間の使い方を考える 3日間のはじまり

第1回は2部構成で進行。第1部のトークセッションでは、清水義次（アフタヌーンサエティ）、青木純（まめくらし）、加藤寛之（サルトコラボレイティブ）、長谷川浩己（オンサイト計画設計事務所）の4名が順次登壇し、RF地区におけるCAの位置づけや価値、公共空間を豊かにする市民の役割について、先進事例の紹介を交え、指針となる考え方を示しました。

第2部のワークショップは、机上ではなく現場へ行って公共の使い方を考えようと、籠田公園へ移動。そして、参加者は用意された6つのテントへ分かれ、配られたカードにそれぞれが「したいこと」を書いていきました。まずは個人で記入した後、内容をグループで共有し、最後に各グループから代表者が自分の考えを全体発表するという流れで行いました。テントの中で話し合うリラックスしたスタイルで、様々な視点の意見が飛び出しました。

第3回

主体的に動く市民の手で、 まちの未来がつくられていく

最終回は、これまでに集まった顔ぶれに加え、周辺の事業者など、約80人が参加。第1部では、長谷川から設計のベースとなる考え方として、「今この地域にいる人だけではなく、観光客や転居者、これから生まれてくる子どもも、“市民”と考え、『CA』は、市民のための居間であり応接間になる場」と定義し、その観点から、これまでの意見が整理されたCAの基本設計案を説明しました。続く第2部では、事前に募集した12人の参加者が「CAでしたいこと」を発表。設計案の特徴を活かした個性豊かな発表に対して、参加者に予め配られた「いいね!」「協力します」と書かれた2種類のカードを掲げられました。発表ごとにたくさんのカードが挙がり、多くの共感が得られていました。これらの提案は今後民間主導で実現が図られていきます。3回の「QURUWA FUTURE VISION」を通じて参加者が主体的に関わる姿が見え、市民の熱い想いが感じられました。1人が旗を振るのではなく、色々な立場の人が参加して積み重ねをしていくことで、よりよいまちの未来が見えてきました。

第2回

CA再整備の目的と課題とは

第2回の冒頭では、長谷川から、第1回で出された意見を踏まえて検討された具体的な設計内容が発表されました。設計案は、「中央緑道は主要回遊動線のQURUWAの中で、東岡崎駅と康生地区を繋ぐ重要な位置にある」と定義付けたうえで、籠田公園から「（仮称）乙川人道橋」までのエリアを「公園」「段丘」「国道1号線周辺」「橋周辺」という4つのブロックに分け、それぞれの特性を整理して検討されたもの。参加者は周辺住民や事業者などのグループに分かれ、「どのようにこの場所を維持していくか」「どういった商売ができるか」など、この空間の具体的な使い方について熱心に議論しました。最後に、各グループで話し合われた内容を発表。高校生からの「SNSに投稿したくなるようなおしゃれな場所にしてほしい」という希望や、事業者からの「出店に必要なトイレや電気、水道などのインフラが整っているともっと使いやすそう」といった指摘など、様々な意見が出ました。

CAでしたいこと〔抜粋〕



まちで祝う公園ウェディング



まちに新たな風景をつくる路上映画祭

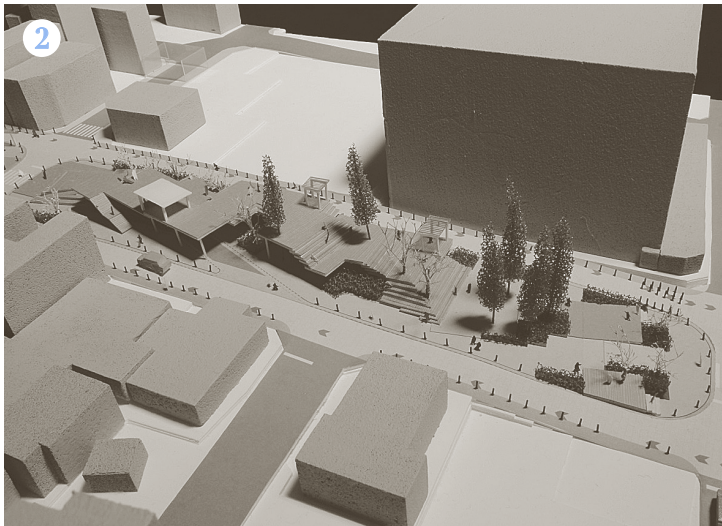


アウトドアオフィス「OSO/TOショールーム」

中央緑道・籠田公園 再整備基本設計 整備コンセプト



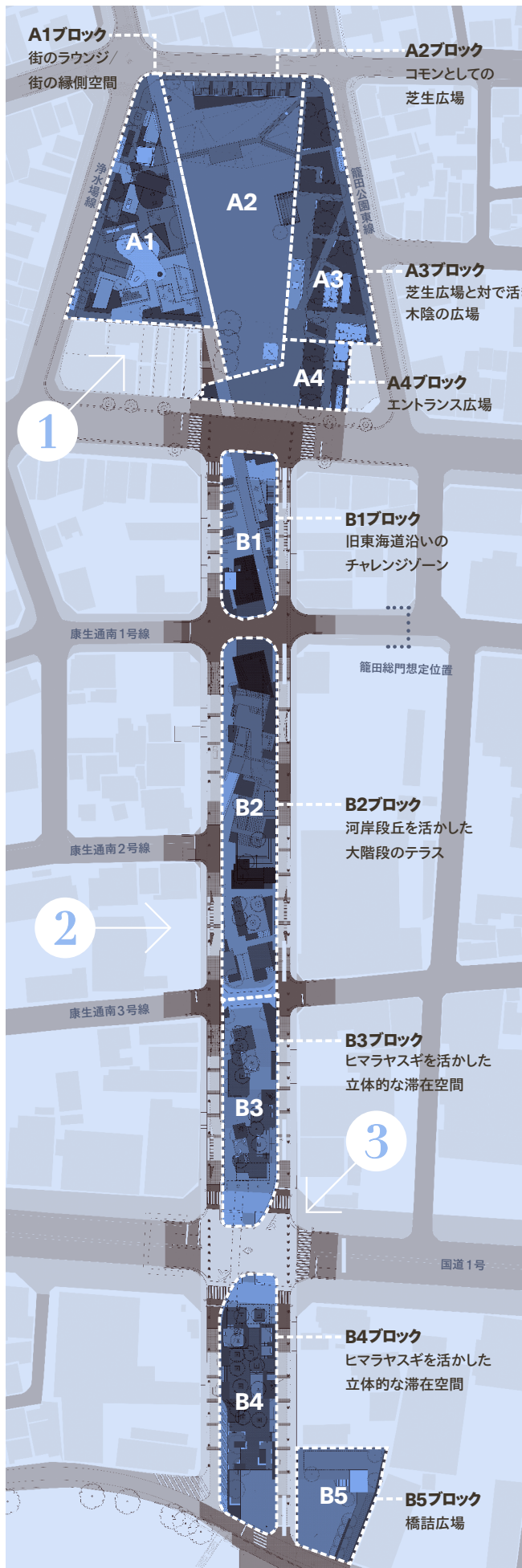
A1からA2A3ブロックを見る



B2ブロック



国道1号からB4ブロックを見る



全体平面図 | → : 模型写真アングル

公共空間の大転換

歩きたくなるストリートのつくり方
『ニューヨーク編』

RF地区の過半を占める公共資産[公共施設・公園・道路・歩道・川など]の利活用に向け、都市的な戦略と民間組織による戦術を織り交ぜた公民連携で取り組むニューヨークでの実践と可能性について、中島直人氏より事例紹介を受けました。日本で豊かな市民生活と経済循環を拡大するための課題とその解決の手がかりを学びました。

パネリスト
中島直人 Naoto Nakajima 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻・准教授
モデレーター
藤村龍至 Ryuji Fujimura おとがわプロジェクト デザインコーディネーター/ 建築家 / 東京藝術大学准教授
日時:2017年1月23日[月] 18:30-20:30 会場:図書館交流プラザ りぶらホール



工業都市のインフラを歩きたくなるストリートへ

中島 | 2000年以降のニューヨーク市は、産業構造の変化によって使用されず放置されてしまった工業エリアが生じていました。また、都心部では自動車交通が飽和し、人々の安全な歩行を脅かしていました。そこで、20世紀のインフラであった河川敷や埠頭の倉庫、線路や道路などを広場や公園へと転換する方針を取り、都市課題を解決することに成功。この取り組みの背景には、公共空間の管理者であるブルームバーク前ニューヨーク市長の存在が大きかったと言われています。9.11テロから半年後、2002年に市長に就任したブルームバーク氏は、12年間の在任期間に多数の公共空間を活用するプロジェクトに着手します。もともと貨物を運ぶ高架線路として使用されていた廃線を眺望の良い魅力的な公園として活用した「ハイライン」、道路空間の再配分によって生まれた広場に観光客が多数訪れる「タイムズスクエア」などがあります。それこそ1960年代から、都市中心部での歩行者天国などはすでに実践されていましたが、20世紀の工業都市で整備された物流や

交通などのインフラを、21世紀のポスト工業都市における歩行者のためのストリートを市全域で整備してきました。

市全体の構造を再編する戦略とゲリ拉的に広場を活用する戦術

中島 | 都市構造の変化を考えるきっかけに、2012年のオリンピック開催都市招致運動があげられます。結果は負けましたが、市全体の都市構造を変革するプランは、活用されていない工業地帯への公共投資と民間投資を誘発し、変化を促す機運に繋がります。大会会場を市内の東西南北に、選手村を中心に配置する計画は、南北の川沿いにある工業地帯を大きく変える狙いがありました。これに先駆けて2005年頃、精肉工場が立ち並ぶ地区で地区の活性化や安全な歩行空間の確保などに向けて、道路を広場化して魅力的な場を生み出すプレイスメイキング社会実験が行われます。通りに滞在する人が増え、飲食店などが次々と参入してくる成果を目の当たりにした翌年、市全体で街路のあり方を見直そうと「ニューヨーク街路ルネサンス運動」が民間団体を中心に起こりました。小さなエリアで行われた取り組みが、徐々に市内全域に広がりを見せます。

オリンピック招致を通じて都市構造の再編を図ろうとした都市戦略と民間主体の小さな実験的な試みを広げていく都市戦術。長期的な計画と短期間に連続的な実験を重ね合わせ、「すべての市民が徒歩10分以内に公園を有すること」を政策に掲げたPlaNYCが発表されます。この計画で重要なことは、都市計画局や公園局だけではなく交通局も、この目標達成に向けて、街路の広場化を推進したことです。行政が公共空間の積極的な活用に向かうきっかけのひとつに、ある地区内の資産所有者や事業者が地域の価値の維持向上を目的として負担金を拠出して運営する組織、BID（Business Improvement District）の存在が影響しています。現在、市内に72か所あるBIDは、治安維持や美化活動をマーケティング活動と捉え、エリアの資産価値向上のために取り組みを行っています。規模によって財政構造が異なりますが、他の事業者に広場を貸し出したり、イベントを企画運営することで運営費を捻出しています。この時期に、ニューヨーク市が描く公共空間の再編計画に対し、地域商業組織が連携して主体的に運営していく、PPP（Public Private Partnership）、公民連携

という考え方が浸透していきます。

創造的で一貫したプログラム

中島 | 治安悪化を改善しようと立ち上がったBID、タイムズスクエア・アライアンスは地域の清掃や防犯パトロールを行っていましたが、徐々に広場や街路の活用に着手していきます。活動を始めた1992年から20年間、犯罪数減少、テナントなどの資産価値向上、週末の通行人数増加など、いくつかの指標に大幅な改善が見られています。活動を踏まえて作成した「地区運営に関する20の原理・原則」において、「良い公共空間活用」とは、「1.良いデザインであること、2.良いマネジメントをすること、3.クリエイティブで一貫したプログラムをすること」だと定義されています。良いデザインが共感を引き起こして合意形成を促し、良いマネジメントがさまざまな活動を呼び入れ、クリエイティブで一貫したプログラムによって見出された地域の固有性や継続的な参加者を獲得するという経験からまとめられたそうです。空間デザインの専門家であるPPS（Project for Public Space）とも協働します。PPSは、人が集まる魅力的な場所が10か所あれば目的地となり、目的地が10地区あれば地域となるというPOWER OF 10+という発想で、さまざまな活動を継続的に誘発していきました。

社会実験とその評価から恒久的な広場のある将来像を描く

中島 | タイムズスクエアの調査では、広場化することで車道を歩く人の減少、交通渋滞の緩和、近隣で働く人がランチに出かける機会が増加していることなどがわかりました。こうして、プレイスメイキングが市民の共感を得たことから社会実験から恒久化と展開し、社会的なインパクトを持つ成果が市内全体へ波及していきました。以降、市では広場を設ける際にはBID等からの公募型を取り、提案が選ばれると、民間団体は協定を市と結び、仮設広場の社会実験から始め、制度設計して恒久化していく。その際に、行政はきちんと評価を行い、広場の必要性、地域との協働性、周囲のポテンシャルといった指標をもとに採点しています。ニューヨーク市の公民連携の担い手であるエリアマネジメント組織がひとつの働き口になっているように、日本でも稼ぐ専門家のあり方を考えてくことが大切です。

地方創生の新機軸

地域に雇用を生み出す
観光産業のつくり方『尾道編』

サイクリスト専用のホテルとして注目されている「ONOMICHI U2」や、地場産業のデニムを実際に職人さんが履いて「リアル」USEDデニムを製作・販売する「尾道デニムプロジェクト」など、観光産業を基軸に事業に取り組むディスカバーリンクせとうち。代表の出原正直氏より、地域の魅力を活かした観光産業から雇用を生み出した事例を学びました。

パネリスト
出原昌直 Masanao Idehara ディスカバーリンクせとうち代表、広島県議会議員
モデレーター
藤村龍至 Ryuji Fujimura おとがわプロジェクト デザインコーディネーター/ 建築家 / 東京藝術大学准教授
日時:2017年1月29日[日] 18:30-20:30 会場:図書館交流プラザ 会議室 301



雇用を生み出す手段としての観光事業

出原 | 繊維産地として知られる広島県福山市で生まれ育ち、家族は繊維の商社を営んでいました。繊維業や造船業で一時代を築いたこの街に戻ってきたのは、9年間務めた商社を退職した頃です。工場は立ち退き、暮らしから産業が遠ざかった、まちが縮小したように感じました。尾道に戻ってしばらくしたある日、繊維、造船、建築、サービス業に関わる高校時代の友人らとの会食で、いつも明るい先輩が「これから10年20年30年先と船をつくっているイメージがどうしてもわかん。これから街に雇用をつくるのができなかったら、どうやって僕らの世代がこの街並みを守っていくことができるんか。」と胸に抱く危機感を話す夜がありました。しかし、すでに工業は衰退をしている、その時に着目したのが地域資源です。鞆の浦や尾道は瀬戸内で優良な観光資源があり、少しずつ魅力が知られつつある状態でした。そこで、雇用を生み出す手段として観光事業を捉え、100先年にまちのためになることを行う「ディスカバーリンクせとうち」を、先輩を含む仲間5人と立ち上げました。

始まりと転機は観光宿から

出原 | 尾道と鞆の浦で宿泊できる体験を考えながら最初に手掛けたのが、路地や起伏のある土地が特徴的な千光寺周辺にある「せとうち 湊のやど」です。同じ敷地内に江戸期に建設された出雲屋敷を建築家・中村昌生氏に、昭和初期に建てられた洋館の島居邸を桐谷昌寛氏にそれぞれ宿泊施設への改装を依頼。尾道にある2つの宿を起点に瀬戸内観光してもらうプランを想定。1年目は集客に困ったものの、今では連泊する海外旅行者で賑わい、年間50%程度の稼働率となっています。海外から来た方を中心に、SNSの口コミが次の宿泊客を呼んでいるようです。次に紹介するONOMICHI U2は、ディスカバーリンクせとうちの中核事業にまで成長した複合施設です。広島県の海運倉庫として使われていた「県営上屋2号」を活用し、年間15万人の来訪者を創出する施設活用のプロポーザルがありました。敷地周辺には歴史と文化が残っており、美しいサイクリングロードとして世界的に注目されるしまなみ海道があります。本州側の起点に位置するため、一般観光、サイクリング、建築を軸にしたレストランや宿泊施設などを有する施設としたいと建築家・谷尻誠氏に依頼。サイクリストが多く訪れるこの地で開く宿泊施設に自信がりましたが、予想に反してオープン当初はレストランを利用する方々が多く訪れてくれました。地域で暮らすご高齢の方が「やっとおしゃれして出て来られるレストランができた」と話されていたことが印象的でした。この施設はさまざまなメディアで取り上げられ、2年目からはホテルも80%程度の稼働率となり、目標であった年間15万人の観光客も達成できています。

産地を知る、つながるきっかけづくり

出原 | U2にはショップがあり、私たちが手掛けたプロジェクトの商品も扱っています。尾道など備後地方は生地、染色、縫製業者などの質は世界に誇るものですが、産地としてまとまった発信はこれまであまりできていないことに気が付きました。そこで、エリアの持つ魅力を産地から発信しようとして「尾道デニムプロジェクト」を始めました。尾道でさまざまな仕事をする270人と540本のユーズドデニムをつくるというものです。1週間履いてもらっては2本目のデニムと交換して丁寧に洗濯することを1年間続けると、漁師の

デニムは潮風で色が落ち、幼稚園の先生は膝にダメージができるなど、それぞれの生活がデニムに写されています。商店街に新設した店舗には、国内外からこのデニムを求めるデニムファンが訪れています。地域の魅力を再発見し、次の世代に発信して繋げていく活動を通して、わざわざ尾道に来てくれる人が増えるのを目の当たりにしたことで自信に繋がりました。次に、共感してくれる人の輪を増やしたいと始めたのが「尾道自由大学」です。2009年、「大きく学び、自由に生きる」をテーマに東京で開校されていた「自由大学」を見学しました。仕事後などにも関わらず主体的に学ぶ人々の姿に感銘し、尾道の文化などについて学ぶ講座を土日に開催。九州や首都圏からも参加があり、ディスカバーリンクせとうちへの就職や地域おこしへの協力にも繋がっています。文化の継承において目的を共有するコミュニティは重要な存在であることを改めて感じました。

はじまりの気持ちを忘れない「せとうちと共に生きる」

出原 | 5人で始めた事業が大きくなる中で、協力者やスタッフが増え、全体で200名程度の雇用を生み出しています。一方で、当初の危機感や思いが少しずつ薄まっていくことを感じていました。改めて、自分たちが活動する意義を「せとうちと共に生きる」と記し、活動の軸と共有しています。私たちは創業時から利益を第一に掲げることはせず、まちに良いと思ったことがあれば責任を持って始めることを大切にしています。そのときに大切にしているもう一つの合言葉が「やってみい、あきらめるな、まあええが」です。どのプロジェクトも立ち上げた1年目からうまくいったわけではありません。あきらめずに町のためになることとして小さなプロジェクトを積み重ねていくことを大切にしています。藤村 | 瀬戸内の外側へ活動を伝える戦略はどのようにされたのでしょうか。出原 | ディスカバーリンクせとうちには、広報PRの専門家はいませんでした。建築や名刺などは国内外で活躍する建築家・デザイナーに依頼するようにしていました。関係してくれたクリエイターがそれぞれ東京で広めていただいたように思います。彼らと組むことで私たちもこの4年間、とても勉強になりました。専門家との協働が広報的な役割を持つだけでなく、プロジェクトに自信を持って取り組むことができる、相乗効果に繋がりました。

まちのトレジャーハンティング @岡崎

まちは僕らのステージだ!

2017年2月18日・19日、「まちのトレジャーハンティング@岡崎」が行われました。QURUWAを5つのエリアに分け、これからのまちの担い手と共に将来のビジョンを描くワークショップを通じて、都市戦略を提案しようという全国でも類を見ない試みとなりました。

行政、民間、専門家、学生、主婦など、立場も世代も異なる人たちが本気で考え抜き、意見を交わし、たどり着いたのは、「自分の暮らしを豊かにすること」と「まちを豊かにすること」を重ね合わせて同時に実現していくという都市戦略の仮説でした。

青木 純 | Jun Aoki
(株)まめくらし 代表取締役/(株)都電家守舎 代表取締役

明石卓巳 | Takumi Akashi
株式会社レイデックス 代表取締役 クリエイトブディレクター

岩本唯史 | Tadashi Iwamoto
RaasDESIGN 代表

瀬川 翠 | Midori Segawa
設計事務所 スタジオ・アンモナイツ代表

西村 浩 | Hiroshi Nishimura
株式会社ワークヴィジョンズ 代表取締役

林 厚見 | Atsumi Hayashi
SPEAC 共同代表

日時：2017年2月18日[土]ー19日[日]
会場：岡崎シビコ6F

プログラム 1日目

10:00 開会式

10:30 まちのトレジャーハンティング
(まち歩きワークショップ)

18:00 オープニングパーティー

プログラム 2日目

9:00 まちのトレジャーハンティング
(まち歩きワークショップ)

15:00 まちのトレジャーハンティング報告会
(宝物の報告と新しいまちの可能性について提案)

17:00 トークライブ

17:45 閉会式

18:30 クロージングパーティー

[*1] まちのトレジャーハンティング@岡崎
報告会ートークライブ
<https://www.youtube.com/watch?v=qx2EJtreK1w>



メモを取りながらまち歩きをするユニットD

「自分がつくりたい未来」とことん考える2日間

今回、定員の40名を大きく上回る82名が市内外から参加応募。その中から選ばれた40名の参加者が会場の岡崎シビコ6階に集まりました。これまでリノベーションスクールやおとがワ! ンダーランド、QURUWA FUTURE VISIONに関わり、本気でまちを変えたいという人々に加え、公民一体となって市民主導で都市戦略を考えるという全国初の取り組みということもあり、市外県外からのエントリーも少なくありませんでした。青木純氏は、開会式のガイダンスで、「中途半端なことをやってもなにも変わらない。2日間で、徹底的に自分たちの未来の暮らしについて考えましょう」と語り、参加者の士気を高めました。

1日目は、まちを歩いて、眠っている魅力——お宝を探し出し、作戦を練り、2日目は、各ユニットで考えたそれぞれのエリアのまちの未来図を報告会で発表[*1]しました。

まちにはどんな魅力が眠っているか

トレジャーハンティングに参加したのは、老若男女、高校生や子育て中の主婦、社会人など様々。また東京や名古屋、東北など、岡崎市外からの参加者の姿もありました。参加者はユニットAからEまで5つのチームに分かれ、それぞれ東岡崎駅前・中央緑道エリア、旧東海道・六供エリア、りぶらエリア、伊賀川エリア、乙川エリアを担当します。各ユニットには、全国各地で活躍しているまちづくりのスペシャリストが、まち歩きやプレゼンテーション作成などの全体を通したサポートを担うユニットマスターとして参加しています。はじめに各ユニットは担当エリアを歩き、まちに眠るお宝を探します。「こんなところに空き地がある」、「川辺は気持ちいいけど、川へ行くまでの道に高低差があって歩きづらいね」、「この駐車場が一面公園だったらいいのに」、「車がどんどん通っているのに、人が全く歩いていない」……など、様々な意見が出されました。普段、何気なく通り過

ぎているまちの魅力と課題が、見方を変えとどどんクリアに見えてきます。

それぞれの立場から、自分がつくりたい「まちの未来」を描く

まち歩きを終えると、会場の岡崎シビコへ戻り、まち歩きの感想や気づき、アイデアなどを話し合いました。「お母さんと子どもだったらあの場所をどう使うだろうか」、「ここでコーヒーを飲めたら気持ちが良いよね」、「地下駐車場のスペースがもったいない、もっと市民に開放しよう」、「あのエリアなら、近くで働いて近くで暮らすことを実践できるのでは」など、魅力になり得る可能性を見つけた各ユニットは、具体的なイメージとともに提案を立ち上げ始めます。現状を否定するだけではなく、現実の魅力をぐっと引き上げるようなアイデアが次々と湧いてきました。しかし、プレゼンテーションを翌日に控え、なかなか提案の方向性がまとまらないユニットも。話し合いは、夜中にまで及びました。そして19日には、議論からプレゼンテーション作成のフェーズへ移行します。報告会での発表形式は自由。自分たちが考えたアイデアやイメージを伝えるため、各ユニットは奮闘します。まちへ繰り出して取材や撮影を行ったり、パワーポイントやデザインイメージを作成したり、更にはギターの練習まで! それぞれの参加者が持つ特技やスキルを用いて、ひとつの提案を作り上げていきました。

リングの上で語る、近い未来のわたしの暮らし

報告会のステージは、四方を参加者が囲むリング形式のレイアウトで、プレゼンテーションは「僕らの都市戦略」と題したユニットA「東岡崎駅前・中央緑道エリア」からスタート。岡崎市内の女子高校生がステージへ上がり、再整備が計画されている中央緑道エリアに「人と人がリアルで繋がれる場所を、自分たちの手で自由に作りたい」と語り、公共空間を舞台に「自立する市民の姿」を提案しました。

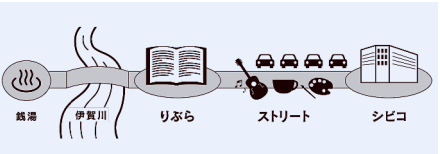


意見を出し合いながら報告資料を作成

続いて登壇したユニットB「旧東海道・六供エリア」は、狭い路地が入り組んだ個性的なまちなみが残る六供エリアの魅力を見だし、この路地や空き地に利用した新しい働き方や子育てなどの暮らし方のアイデアを発表しました。さらに、まちのことを自分ごととして捉えるために「みんなの気持ちを1mmあげる」というキャッチフレーズを掲げ、参加者1人1人がまちとの関わり方を宣言。この中で、移住や起業といった大掛かりなことではなく、ただ遊びにくるだけの「まちのエキストラ」も、まちにとっては重要な役割だということを伝えました。ユニットC「りぶらエリア」は、学生をはじめ毎日たくさんの利用者が訪れるりぶら周辺の駐車場を統括的にマネジメントし、岡崎シビコをはじめとしたまちなかへ人を回遊させるためのオープンスペースの再整備を提案しました。岡崎城や八丁味噌蔵など、岡崎らしいコンテンツが身近に存在する伊賀川エリアを担当したユニットD「伊賀川エリア」は、「遊ぶように働く」という職住近接の暮らしをエリアブランディングとして提案。感度が高い住人を呼び込む作戦を発表しました。

5時間かけて乙川周辺を散策したなかで、出会った人はたった「2組」という衝撃的なデータを提示したユニットE「乙川エリア」は、日常では車に乗り、乙川を普段使いすることがない多くの岡崎市民と乙川とをつなぐ接点をつくる戦略を「艶」というキーワードで打ち出しました。そもそも、「都市戦略」とは何か。このまちで、どんな暮らしの未来を描くのか。この難しい問いに対して、それぞれの年齢、性別、職業、立場から、皆が「自分ごと」として真剣に向き合いました。この2日間を通して、「自分たちのまちを、自分たちで良くしていく」という強い熱意と原動力が高まっていくのを感じました。

[執筆：前田智恵美]



ユニットCの提案「Park / ing」



リング形式のステージで行った報告会

トークライブ

柿原優紀 | Yuki Kakihara
Tarakusa 株式会社 代表

影山知明 | Tomoaki Kageyama
クルミドコーヒー店主

青木 純 | Jun Aoki

西村 浩 | Hiroshi Nishimura

日時：2017年2月19日[日] 17:00-17:45
会場：岡崎シビコ6F

各ユニットの発表を受けて

青木純氏の進行のもと、トレジャーハンターを務めた西村浩氏、東京・西国分寺でカフェ「クルミドコーヒー」を営む影山知明氏、地域の資源を活用した結婚式を企画運営する「Happy Outdoor Wedding」の柿原優紀氏によるトークライブが報告会の後に行われました。各ユニットからのプレゼンテーションを受けて、岡崎の資源やまちづくりへの向き合い方などを、より深掘りしていきます。

公共空間が半数を占める中心市街地

少年時代を岡崎市内で過ごした影山氏は、「QURUWAは、公共空間が半数を占めると聞きました。端的に言えばまちがスカスカになっている」と指摘。康生が賑やかだった頃を知る影山氏は、この状況をマイナスに捉えてしまったそうですが、「今回トレジャーハンティングの参加者は、この状況をまちの資源と捉えていた。これは、いいスタートだと感じました」と続けました。

それぞれのレイヤーで未来を描く

第一子の出産直後である柿原氏は、子どもを抱いてリングへ登壇。会場には子ども連れの参加者の姿が多くあり、子どもたちの笑い声や泣き声が聞こえていました。柿原氏は「これだけ子どもたちが賑やかにしていると、許容されている安心感がありますね」と破顔。トレジャーハンティングについては、「お母さんを始め、高校生や、岡崎で働きたい人など、いろんな人がそれぞれの未来を描いていました。立ち位置が違うけど、描いている方向は概ね一緒だという印象を受けました。誰かの計画だけを通してではなくて、それぞれのレイヤーで行動していくことが大事だと思います」と感想を述べました。

まちは変わるし、自分も変わる

今回のテーマである「都市戦略」について、



西村氏は「1度決めたら変わらないものではなく、毎年変更していけるという考え方のほうが関わりやすい」と語ります。これを受けて柿原氏は、「自分が結婚する25歳のときに事業を始め、ウエディングが“自分ごと”だった。でも35歳になって子どもが産まれて、今、目につくのは子どものことや妊娠中の女性、もう少し年上の世代のこと。自分の変化を感じています」と明かしました。

なんとなく始めたことが天職になることもある

状況や視点が変わることを受け入れ、その視点で行うことが大切だと話す柿原氏に影山氏も同意。「最初はカフェが好きじゃなかったけれど、実家を建て替えるタイミングでなんとなくピンときたからカフェを始め、今では天職だと思っています。たまたまの出会いやアイデアがきっかけで踏み出し、意外と自分はこれが合っていた、と気づくこともある」と影山氏は言います。

エリアを小さく区切って、個性を打ち出す

そして、岡崎のまちづくりの話題へ。QURUWAについて、影山氏は「まちに活気を取り戻していくことを目的としたときに、空間を区切ることはすごく大事。でも、歩く感覚で言うと、QURUWAでもまだ大きい。もっと小さくてもいいかという気がします」と指摘。西村氏も「対象範囲が大きすぎると、活動するプレイヤーの数が足りないことがある。QURUWAも、エリアごとに役割を分け、違うプレイヤーが違う目的で集まるように、個性の打ち出し方をもっと議論した方がいい」と意見しました。

変化していく都市戦略

青木氏は、この成果は市民が真剣に考えた一つの正解であると評価した上で、「これが最終回答ではありません。状況もプレイヤーも変わっていくなかで、その実態にあわせて、どんどん変化していく都市戦略がいいのかなと思います」と続け、トークライブは幕を閉じました。

[執筆：前田智恵美]

私たちの QURUWA 戦略

2015年4月から2020年3月まで5年間かけて実施される「おとがわプロジェクト」の2年目は、さまざまな社会実験やワークショップを実施し、具体的な公民連携の課題と可能性を見出すことになりました。先に開催された「まちのトレジャーハンティング@岡崎」の成果も踏まえたディスカッションでは、市民主導の行政参加による都市戦略、りぶら周辺の公共空間を活用する社会実験の提案、エリアを繋ぐ一体化したストリートデザインを中心に議論が展開されました。

- 内田康宏 | Yasuhiro Uchida
岡崎市長

清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
リノベーションまちづくりプロデューサー/
アフタヌーンノサエティ代表

泉 英明 | Hideaki Izumi
かわまちづくりプロデューサー/
有限会社ハートビートプラン代表取締役

藤村龍至 | Ryuji Fujimura
おとがわプロジェクト デザインコーディネーター/
建築家 / 東京藝術大学准教授
- 日時:2017年3月21日[火]18:30-20:30
会場:図書館交流プラザ りぶらホール

藤村 | 公園、河川、道路の利活用を総合的に取り組んでいることが先進事例とされるQURUWA戦略、市民自ら都市戦略を提案する「まちのトレジャーハンティング@岡崎」の成果をどのように捉えているのでしょうか。

内田 | 参加する多様な市民から、能動的な意見が出てきたことに驚きました。2年間の活動を通して、まちづくりに関わりたいという意識が芽生えたことは財産です。国からも先進事例であると注目されており、ひとつの事業に対して国交省から20回も視察があるのは初めてのこと。QURUWA戦略を実施するためには行政の調整も必須なため、地域課題をどのように解決して進めていくか、助言を受けながら取り組みたいと考えています。

泉 | QURUWA戦略は、民間の投資を誘発するために公共が投資するという画期的なものです。従来の都市計画はつくることを重視していましたが、今回は使うことを重視しています。行政も民間も高度なバランスが求められることから、実験的な取り組みを2年かけて行い、民間事業者も出店する条件を見出しています。同様に、行政がどう答えるのかという対話の道筋が見えています。随時更新していくものがこれからの都市戦略にふさわしいのではないのでしょうか。

清水 | QURUWA戦略は、行政主導の市民参加ではなく、民間主導の行政参加と逆転していることが特徴です。行政と民間それぞれの役割が変わりつつある中で、新たな役割をしっかりと重ね合わせなくてはなりません。

私はリノベーションまちづくりに携わる中で、江戸時代に地主や家主の代わりに土地や家屋を管理する者である家守の存在を知りました。江戸で暮らす60万人を管理する町役人が250から300人ほどおり、その下に20,000人程度の家守がいたそうです。つまり、30人に1人の家守が役人と一緒に江戸を支えてきたのです。現代版家守の先駆的な事例として知られる岩手県・紫波町のオガールプロジェクトという公民連携プロジェクトがあります。主体の紫波

町は公民連携基本計画の中で受益地である公民連携エリアを設定したことがプロジェクトの推進に繋がりました。公共投資によって利益を受けるエリアを敷地面積の10.7haだけにせず、敷地を取り囲む80haと設定し、民間の投資を誘発した点が評価されています。

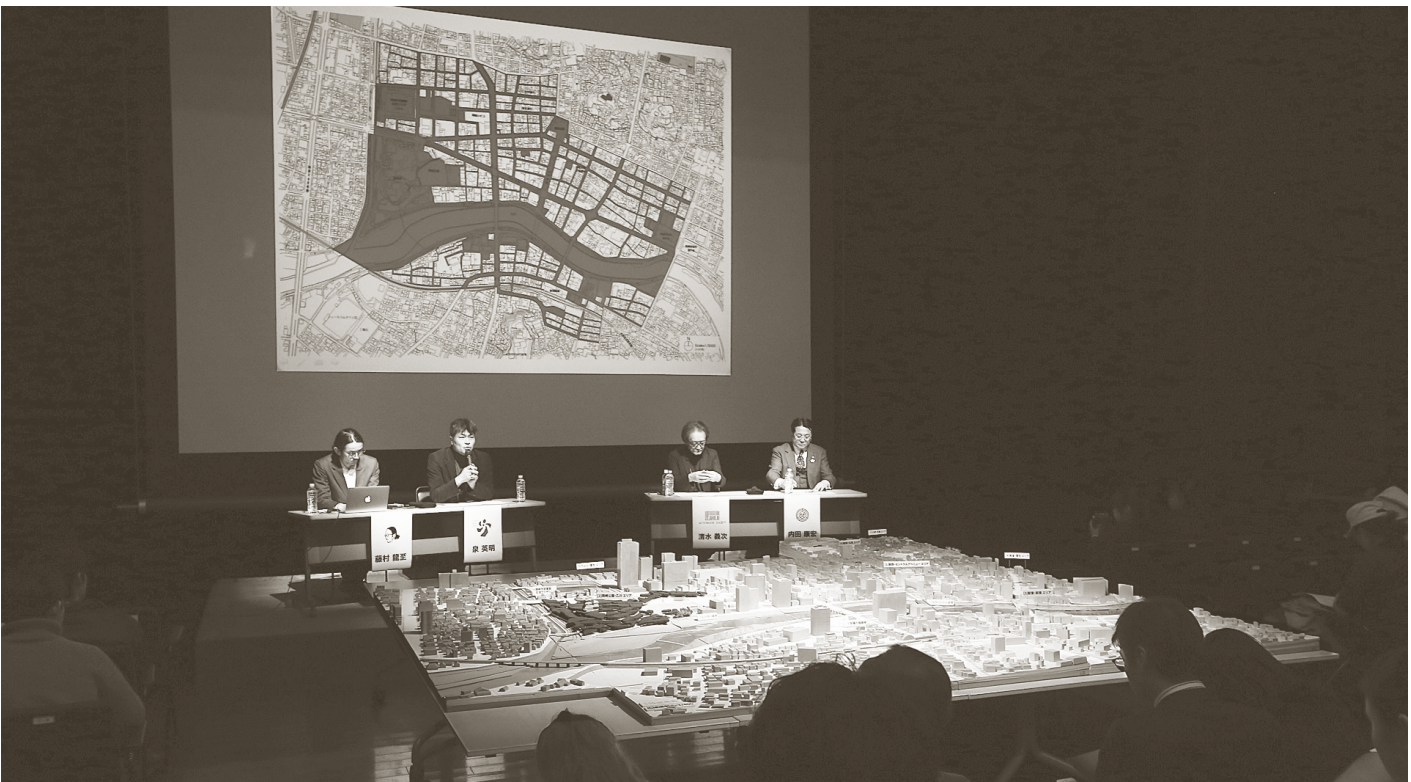
今までのように公共施設を建設すればまちが良くなるという考え方はもはや通用しません。民間事業者を周辺の受益地に巻き込み、公共投資を回収することが求められる時代になってきています。そのためには民間事業者が共感し、責任を持って行動するために行政がどのようなメッセージを出すのが重要です。

おとがわプロジェクトを進めるRF地区では、かつて公共投資が行われた康生エリアに再投資し、長期にわたって事業費を回収する仕組みがすでに動き始めていますが、岡崎市は額田のような農村や中山間分や新しい生活圏であるJR岡崎駅周辺も含まれていてとても広い。新旧交わる広大なエリアを受益地としてどのように連結して、豊かな岡崎をつくっていくのか。この都市戦略を盛り込んだQURUWA戦略を公民連携基本計画としてまとめていくことが求められているのではないのでしょうか。

内田 | 新しい考え方が起きているのは間違いありません。公民連携のひとつとして岡崎市も家守構想で遊休不動産の活用をどのように進めたいかと動いています。この素晴らしい取り組みを広げていきたいです。

藤村 | RF地区137haのうち、国、愛知県、岡崎市が管理する土地は約半分。大家さんがきちんとアパートをきれいに維持しないとお客さんがつかないように、大家である行政が公共空間に再投資しないと市民がまちを離れてしまう。その時、現在のエリアには人がいるところにきちんと投資するのが大切と考えられており、年間約140万人も来場者がいるりぶらを活用することが大事だろうと言われています。オガールプロジェクトでは雪捨て場の投資が地域でお金を回す仕組みになったと仰られていましたが、岡崎市では何をすべきでしょうか。

清水 | 籠田公園周辺という家賃が安いエリアから、民間投資のリノベーションが起き、これまでにないコンテンツが生まれ、人がすでに集まり始めているのはスピード感があるからです。次に動かすのはりぶら周辺が最適です。りぶらは周辺に芝生がいっぱいあり、伊賀川も繋がっています。国道1号線をアンダーパスで通り抜けられるいいエリアなのですが、シビコの



前にある土地の利用がもったいないというのが率直な感想です。テラスや駐車場、伊賀川を繋ぐきっかけが、現在コンビニが入っている店舗から生まれたら、この一帯が激変すると考えています。

現在、りぶら前の駐車場は、イベントをやるには風が強すぎて難しいと言われますが、社会実験してみてもどうでしょうか。エリア周縁を歩いて繋ぐために、車専用になっていたストリートを歩行者中心や低速の自転車が共存するストリートデザインを検討すべきだと考えています。

泉 |すでに広大な河川空間を活用する社会実験、おとがわ!ンダーランドを行ったことで、殿橋や河川空間などを活用する主体者や空間的な可能性を見出すことができました。これまで人目に触れにくかった河川敷に、歩行者や運転者の視線誘導をすることができたのも特筆すべき点です。

近年、公共空間を広場化し、楽しいコンテンツが生まれ育ち、賑わいが生まれ魅力が増すプレイスメイキングは世界で行われています。公共空間に建物を建てるのではなく、プレイスメイキングで人の居場所にし、次の民間投資を生み出す鉄則の方法として、LQC(Lighter, Quicker, Cheaper)という方法があります。ニューヨークのタイムズスクエアでは、車道を広場化してパラソルやベンチを設置し、出店を促すことで歩行者が増え、犯罪が減り、周

辺店舗の売上が上がった事例もあります。

使い方のイメージが市民の賛同を得られるように歩行者専用の道路にし、受益地の生活者にプラスがあることを確認することや交通の問題をきちんと合意形成で解決していくが必要です。岡崎も籠田公園から連尺通り、りぶら、乙川では太陽の城跡地や堤防など、通過交通しかないところが一体となって活用され始めたらどう変化が起きるか実践してみてもどうでしょうか。

内田 | りぶら前がゴールデンスポットであることは間違いありませんが、国からの補助金で整備したエリアのために勝手に進められないという課題があります。岡崎市は中心市街地に駐車場が少ない指摘されていますが、常時必要なわけではありません。現時点でそこまで踏み込むことは諸条件の中で難しいですが、次の一手を慎重に考えているところです。

藤村 | 世界中で公民連携やプレイスメイキングが起き始めている中で、岡崎らしい街路や河川の使い方が問われてくると思います。その時、岡崎らしさとはどこに生まれるのでしょうか。

清水 | 乙川は岡崎らしい場所ですが、さらに変革が必要です。りぶらまで乙川沿いを歩いてくのですが、乙川っていいなと本当に思います。社会実験で殿橋テラスができたことで多くの人にその魅力が伝わったように、4つの橋詰を使い倒して、通り抜ける2万台の車を使用する人にアピールしてみてもいいかがでしょうか。

泉 | おとがわプロジェクトでしかできないことは人道橋の活用にあります。16mと非常に幅広い人道橋だけでは、おそらく人が落ち着かないはず。この時、人道橋でプレイスメイキングが出来れば、イベント開催時以外でもくつろぎたいという状況が生み出せるでしょう。橋上に居心地の良い建築があったり、カフェやレストランがあって河川敷に降りていくことができる。これは世界にほとんどない事例になると思います。

内田 | 岡崎には歴史資産と乙川の河川空間がある。大阪も利用されていない河川空間を活用し始めたことで雰囲気が一変したように、これらを活かすことが岡崎のまちづくりの根幹だと考えています。人の流れができた時に、どこに行ってもいいかわからなくなつては困る。そこで人道橋の先に、事務所機能を持った休憩所であり、お土産屋、情報を得ることができる場所を考えています。また、新しい移動手段としてすでにヨーロッパの主要都市で導入されているレンタサイクルを導入などに取り組んでいきたいです。

藤村 | もともとはインフラの再投資、再整備から始まりましたが、商業や働き方の問題にまで領域横断していくように育ってきました。人道橋などのハード整備までまだしばらくかかりますが、それまでに出来上がった施設を使いこなす人を育てていくような展開をしていきたいと思っています。ありがとうございます。



プログラムレポート

まちで見つける、 まちを楽しむコツ

まちのトレジャーハンティング@岡崎
プレシンポジウム

ゲスト

本郷紘一 | Koichi Hongo

クリエイティブシンカー / 株式会社 GUILD 代表取締役

宮崎晃吉 | Mitsuyoshi Miyazaki

HAGISO 代表 / 一級建築士事務所 HAGI STUDIO 代表

日時: 2016年12月16日[金] 18:20-20:50

会場: 図書館交流プラザ リぶらホール



2人の話に真剣に耳を傾ける参加者。会場は熱気に包まれました

QURUWA

パブリックミーティング

岡崎の まちなかの イメージについて 話してみる会

日時: 2016年11月3日[木・祝] 19:00-20:30

会場: 図書館交流プラザ リぶらホール

自分たちのまちの未来や暮らし方を提案する「まちのトレジャーハンティング@岡崎」のイベントとして、ゲストの2人を招き、自分の暮らしをもっと楽しむコツや、楽しさを見つけるコツについての事例紹介が行われました。はじめに、「一杯のコーヒーが街を豊かにする」という理念のもと、宮城県仙台市で移動式・テイクアウトのコーヒーショップを営む本郷紘一氏が登壇。本郷氏は、緑豊かなまちを楽しむために、2015年5月に移動式コーヒースタンド「SENDAI COFFEE STAND」をスタート。これがあっという間に人気になり、その年の12月には仙台のまちなかに実店舗を構えるまでに。さらに、利用率の低い公園で開催した「Brooklyn Dayout」、人通りの少ない緑道を舞台にした「Tohoku Coffee

おとがわプロジェクトのファンとサポーターを増やすことを目的に、まずはみんなで岡崎のまちなかの過去や現在のイメージを話し合ってみよう、という主旨で開催。高校生から60代まで幅広い世代から46名の参加がありました。冒頭で岡崎の中心市街地における現状や課題、活用可能な公共空間などについて説明された後、6つのテーブルに分かれてのグループワークが行われました。1つのテーブルに7-8名が座り、岡崎のまちなかについて知っていることをふせんに書き出し、テーブルに広げられた地図の上に貼っていきます。その後、参加者が各テーブルをまわり、書かれた内容を見て「新発見したこと」には赤いシールを、「共感したこと」には青いシールを貼りました。赤いシールが多く貼られた意見は、「まちなかには江戸時代から続くお店が多い」「康生エリアにはおしゃれな服屋さんがある」「籠田公園の芝生は市民が管理している」など。一方、青いシールが貼られたのは「八幡町のニ七市が楽しい」「東岡崎駅の岡ビルがレトロで好き」「乙川の夕日がきれい」など。なかには「共感することが多すぎてシールが足りない!」という声も聞こえてきました。

Stand Fes」など、普段使用されていない公共空間を活用したイベントを企画し、自分のやりたいことや、したい暮らしの延長に、まちなかに新しいにぎわいを生み出しています。次に、東京都・谷中で2013年よりカフェやギャラリー、レンタルスペースなどを有し、「私営の公共施設」を掲げる「HAGISO」を設計・運営する宮崎晃吉氏が登壇。はじめは来場者が少ないなど様々な困難にぶつかりながらも、工夫と調整を重ね、2015年には年間3万人以上が来場するまでになりました。現在は、「谷中のまち全体を一つの大きなホテルに見立てる」というプロジェクトをスタート。2015年11月には木造アパートをリノベーションした宿泊施設「hanare」をオープンさせ、この「まちに泊まる」という取り組みを全国に広げる「日本まちやど協会」も設立しました。

宮崎氏は、空きアパートや利用者の少ない公園、人が通らない緑道など「価値が低いと思われるものこそが宝」と言います。それらをどんな想いでどう使うかによってまちが変わるということを、2人の事例から理解することができました。

〔執筆: 前田智恵美〕



幅広い世代が参加し、岡崎のまちなかとの関わりについて話しました

最後に、今回の会で新発見した岡崎のまちなかのイメージと、「自分だったら、岡崎のまちなかはどう関われるか」というテーマで個別ワークを行い、各グループから発表がありました。ここでは、「すてきな景色を探してSNSで紹介したい」「面白い建物があるから、もっと調べてみようと思う」「まちなかに若者が住めるシェアハウスを作りたい」など、なぜそうしたいかという理由も含めて、熱のこもった多彩な発言がありました。

会が終わると、参加者からは「次はどうしたらまちが元気になるか、具体的なアイデアをもっと考えたい」という意見も聞かれました。岡崎のまちなかをよりよいまちへ引き継いでいくために、みんなで一緒に考えて、実現していきます。

〔執筆: 前田智恵美〕

3つの会議

デザイン会議/ 官民連携調整会議/推進会議

公民連携まちづくりを推進するために、

「デザイン会議」「官民連携調整会議」「推進会議」という3つの会議を開催しました。

デザイン会議

専門家と主要なまちづくりの担当部署のメンバーが公共空間における都市デザイン調整等を行う会議

●メンバー

〔岡崎市市政アドバイザー〕

清水義次 | アフタヌーンソーエティ代表

藤村龍至 | 東京藝術大学准教授

泉 英明 | 有限会社ハートビートプラン代表

〔ランドスケープ専門家〕

長谷川浩己 | オンサイト計画設計事務所

〔民間事業者〕

〔岡崎市職員〕

●第1回

日時: 2016年8月4日[木] 13:30-15:30

場所: 福祉会館6階ホール

内容: 主要回遊動線 QURUWA の提案

RF地区の活性化には回遊性の向上が必要という意見を基に、主要回遊動線 QURUWA が提案されました。

●第2回

日時: 2016年8月29日[月] 13:30-15:30

場所: 岡崎市役所東庁舎2階大会議室

内容: QURUWA 戦略アクションプランを討議

主要回遊動線における各エリアと昨年から継続されているまちづくり事業との連携などを確認しました。また、中央緑道等基本設計の方針について、意見交換しました。

●第3回

日時: 2016年10月25日[火] 13:30-15:30

場所: 岡崎市役所分館3階大会議室

内容: セントラルアベニュー(=CA)基本設計討議

CAとQURUWAの関係について確認し、実施されたCA基本方針ワークショップの結果を報告。QURUWAにおける公共空間(施設のみではなく、道路や公園なども含む)の現状について共有し、エリアごとの取り組みや問題点を検討しました。

●第4回

日時: 2016年12月6日[火] 13:30-15:30

場所: 岡崎市役所分館3階大会議室

内容: CA基本設計の進捗共有、

エリアマネジメントの組織体制討議

民間事業者との連携体制の構築の必要性が委員より提案され、エリアマネジメントの組織体制や、人材育成なども視野にいれることになりました。CA設計業務の進捗状況と、ワークショップの内容や課題などを議論しました。

●第5回

日時: 2017年2月27日[月] 13:30-15:30

場所: 岡崎市役所東庁舎7階701号室

内容: まちのトレジャーハンティングの成果共有、

リーディングプロジェクト検討

トレハンの報告をもとに、QURUWAにおける公民連携の組織体制、情報共有などを中心に検討しました。

官民連携調整会議

関係各課と民間まちづくり組織のメンバーが横断的な政策連携を図る会議

●メンバー

〔おとがわプロジェクトデザインコーディネーター〕

藤村龍至 | 東京藝術大学准教授

〔まちづくり組織〕

岡崎活性化本部、株式会社まちづくり岡崎、

岡崎まち育てセンター・リた

〔岡崎市〕

企画課、100周年記念事業推進課、文化総務課、

商工労政課、観光課、都市計画課、交通政策室、

拠点整備課、乙川リバーフロント推進課、公園緑地課、

道路維持課、建築指導課、建築課、社会教育課

●第1回

日時: 2016年8月9日[火] 15:30-17:30

場所: 福祉会館6階ホール

内容: 3つの会議体と主要回遊動線QURUWAの共有

●第2回

日時: 2016年9月28日[水] 10:00-12:00

場所: 岡崎市役所西庁舎4階401号室

内容: QURUWA、関係各課の課題を討議

●第3回

日時: 2016年11月15日[火] 13:15-15:00

場所: 岡崎市役所7階701号室

内容: CA基本設計の進捗共有と討議

●第4回

日時: 2017年1月24日[火] 10:00-12:15

場所: 福祉会館6階ホール

内容: エリアマネジメントの組織体制を共有

推進会議

RF地区整備を統括する会議。デザイン会議からの提案を受ける。

●メンバー

市長、両副市長、市長公室長、企画財政部長、

文化芸術部長、環境部長、経済振興部長、

都市整備部長、土木建設部長、建築部長、

100周年記念事業推進担当部長、

都市整備部拠点整備担当部長

●各回

第1回: 2016年4月18日[月]

第2回: 2016年6月20日[月]

第3回: 2016年8月15日[月]

第4回: 2016年11月8日[火]

第5回: 2016年12月19日[月]

第6回: 2017年3月29日[月]

PROJECT TIMELINE

*タイムラインは順次更新・修正

プロジェクトのタイムライン

平成25年度

- 岡崎活性化本部による乙川リバーフロント地区基本方針策定のための提言書発表
- 岡崎市による乙川リバーフロント地区整備基本方針策定

平成26年度

- 乙川リバーフロント地区整備基本計画策定

平成27年度

- おとがわプロジェクト 発足
*おとがわプロジェクトとは...乙川リバーフロント地区整備計画の別称
- キックオフフォーラム開催
- 第1回シンポジウム開催
- デザインシャレット実施[パブリックミーティング2回]
- シャレット展示会開催
- おとがわキャラバン in 市役所開催
- 第2回シンポジウム開催
- おとがわキャラバン in 籠田開催
- 中間提言発表
- まちづくりワークショップ[1]開催
- おとがわキャラバン in りぶら開催
- おとがわキャラバン in 中央緑道開催
- まちづくりワークショップ[2]開催

平成28年度

- まちづくりワークショップ[3]開催

- グランドデザインフォーラム開催・「基本構想」発表
乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン基本構想[案]発表
- グランドデザイン展示会開催

- おとがわ!ンダーランド

- デザイン会議スタート

- QURUWA FUTURE VISION、第2回リノベーションスクール@岡崎

- QURUWA パブリックミーティング

- エリア再生連続シンポジウム

- まちのトレジャーハンティング@岡崎
- QURUWA 戦略フォーラム

BACK NUMBER

Vol.1

キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
収録



Vol.2

キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
収録



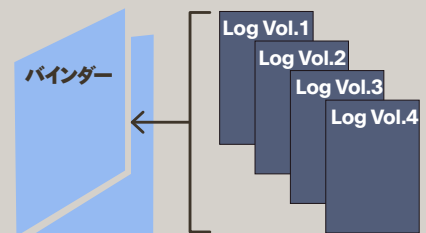
Vol.3

おとがわプロジェクト
の全体像
グランドデザイン
フォーラム
市民インタビュー
収録



『OTOGAWA GRAND DESIGN Log』

本冊子は、配布するバインダーに挟み、
各号をまとめて保管下さい。



発行元：岡崎市

発行日：2017年3月

監修：NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

編集：浅野翔

デザイン監修：刈谷悠三+角田奈央/neucitora

執筆補助：前田智恵美

写真：奇天烈写真館

問い合わせ先：

NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

tel.0564-83-9012

mail: otogawaproject@okazaki-lita.com

web: http://otogawa.jp

Facebookは「おとがわプロジェクト」で検索